

明日につなげる ー無償化裁判がもたらしたものー

可能性広げる「財産」

九州弁護士は、主に北九州や福岡を中心に活動する弁護士たちで構成されている。そのうち、訴訟進行における弁護士会議があれば定期的に集まるいわゆる「実働部隊」は10人ほどで、中には弁護士活動だけでなく朝鮮学校を支える活動に精を出すメンバーもいる。他方で、特徴的なのは皆が口をそろえるほど際立つ仲の良さだ。その根底には無償化裁判を通じて、弁護団の一員である自分自身に、また原告や同じ弁護団のメンバーをはじめとする関係者たちに向き合い、築いてきた関係性がある。

九州弁護士(中)

辛い記憶

2019年の一審判決以降、服部弘昭・前弁護団長からのバトンをつなぎ、九州弁護士団長を務める後藤富和弁護士。現在、市民団体「福岡地区朝鮮学校を支援する会」の活動にも関わる後藤弁護士が、その原点ともいえる無償化裁判に、弁護団の一人として携わることになったのは、自身の過去に対する自責の念からだった。
「小学校のとき、僕と2つ下の妹と同じ年の差で、在日の姉妹がいた。近所で同じ小学校に通っていたこともあって妹は当時、その同級生とよく遊んでいた。けど、親や周りの大人たちは『あの子とは遊んじゃダメ』という。理由も説明せずにタヌという大人たちの態度をみて、モヤモヤがずっと残っていた」(後藤弁護士)
そうして時が経ったある日のこと。妹が高校生になった頃だった。後藤弁護士は「妹の同級生だった日の子がそばのマンションから飛び降りて自殺した」知らせを聞いた。
「直接の原因は別にあったのかも知れない。けど『あの子と遊ばなさんな』という地域の人々の眼に、彼女を追い詰めてしまったのではないかとずっと負い目があった。今でも実家に帰ると鮮明に思い出す。辛い記憶です」
幼少期の記憶を痛みとして心に刻んだこの経験は「社会の中で虐げられ、追いやられている人たちの力になりたい」と、彼が弁護士を志す一つのきっかけとなった。

帰れる場所

2019年3月14日、福岡地裁小倉支部前。九州無償化裁判の一審判決日だったこの日、大勢の支援者が裁判結果を、固唾を飲んで待っていた。閉廷後、支持者に向かい駆け寄る弁護団の2人は握っていた旗を広げ、俯いた。「不当判決」。
旗出しを担当した朴憲浩弁護士は、当時を思い起こし、言い尽くせない悔しさと怒りをにじませた。
「訴訟が始まったときはまだ法学部の大学生で、負けるわけがない、むしろチャンスだと思っていた。最後の最後まで勝つと信じていたし、だから本当に失望でしかなかった」
2006年に法学部へ進学。4年間、勉学の傍ら留学同での活動にも励んだ朴弁護士。その矢先、大学4年だった09年に、排外主義団体による京都第一初級(当時)への襲撃事件が発

加わり、現在52歳。聞けば、加入当初に印象に残っていることがあるという。
「いつだったか、小倉駅前で朝高生たちが街頭アピールをしていた。雨か雪が降っている日だった。街頭に立つ生徒たちは、裁判の結果が出る頃には卒業している子たち。時折、心ない人に暴言を吐かれてしまったり、彼らの姿が衝撃的だった。この状況を生んでいるのは差別している側、日本人の問題であると強く感じました」
そうして「日本人こそ立ち上がらないか」という意識で弁護団に参加した。



一審判決後の報告集会。会場は同胞や日本市民など、350人以上の人であふれかえった



九州中高の生徒たちによる公演

後藤弁護士が朝鮮学校と関わる契機となった同会は、当時、朝鮮学校生への聞き取り調査をし、その調査結果を発表。被害の深刻さを声明発表という形で内外へ知らせた。
40代半ばで九州弁護士団に在日朝鮮人の友人
「実は提訴の日と弁護士登録した日が一緒なんです。清田美喜弁護士が」
そう語りあげに話すのは彼女が弁護団に参加した



旗出しをする弁護団のメンバー (2019年3月14日)

生した。また、翌年には高校無償化制度から、朝鮮高校が除外されるかもしれないという状況に、「法律を本格的にやろう」と決意を固めた。
そのため、訴訟が始まれば「必ず弁護団に参加したい」と思っていたと朴弁護士はいう。
2015年、晴れて弁護士となり、就職先が偶然にも金敏寛弁護士(現・九州弁護士事務局長)の法律事務所だったことから即参加の流れに。2013年6月の弁護団発足から約一年半後、九州弁護士団へ合流した。
小中高の過程を日本学校に通い、留学同に出会うまで、同じコミュニティとのつながりがなかったという朴弁護士。弁護士として訴訟準備にあたる期間は、彼の中で朝鮮学校の魅力に惹きつけられ、一方でその価値を見出す時間でもあった。
「私には民族的に帰れる場所がない。ウリマル(朝鮮語)も話せないわけで。この間、もしハッキョに通っていたらどんな人生を送っていたらどう想像もした。もっと違う生き方があったのかなど。朝鮮学校は在日朝鮮人社会における一つの集まる場所だと思える。出目を隠したり確認したりする必要もない帰れる場所。同胞同士が関わりを続けていく場として大事だと思つた」(朴弁護士)

連載「明日につなげるー無償化裁判がもたらしたものー」では、各地の弁護士とその関係者たちにスポットをあてる。かれらが弁護団に携わることになった経緯や裁判過程の気づき、見据える課題などから、高校無償化裁判がもたらしたものか何かを確認し、今後も続く民族教育擁護運動について考える。
(韓賢珠、続)

短編小説

道づれ

- 1 -

キム・ピョンフン

今日から新しい企画として朝鮮民主主義人民共和国の短編小説をいくつかを選んで連載を始めます。解放後に創作発表された有名作家の作品の中から、南朝鮮でも広く知られているだけでなく、在日同胞の間でも愛読され、かつ日本語に翻訳されているものに限って紹介する。初回は金炳勲(ギム・ピョンフン)(1929~2013) 作「道づれ」を22回にわたって掲載する。
(編集部)

去年、私が道党委員会総会を終えて帰路についたときのことである。
会議で決まったことはすべて重大な課題だったので、私は出発に先立ってあらかじめ電話で道党委員会に連絡して、翌朝に執行委員会を招集しておくように言っておいた。
私は汽車に乗ってからもずっと、総会の決定をくり返してくり返し思い浮かべながら、道の執行委員会に提出する具体案を頭の中で考えていた。しかしなかなかこれといった妙案が浮かばなかった。何しろ今度の課題は、山間僻地のわが郡としては、多少、荷が勝ちすぎている。私はあれこれ考えたが、ようやくいくつかの基本方針とその方法をあみだした。それから、明朝、集まるはずの執行委員の顔を二人ひとり思い浮かべながら、それぞれに仕事を割り当ててみた。そして現に彼らが目の前にいるかのよう

「どう？ やれそうか？」
とひとりで念をおしてみた。
だが、執行委員のうち一人として威勢よく返事をする者はいなかった。新たな課題のもつすばらしい夢と展望にみな興奮しているもの、何かもじもじためらっている顔が自信のなさや不服をあらわしていた。
私自身、自分であみだした具体案と仕事の分担に少しも満足していないのだから無理もなかった。
重い頭を上げて窓外に眼をやると、列車はいつの間にか山峡を抜けて広い平野を走っていた。車窓から入ってくる6月のさわやかな風からは、ほろ苦い、新鮮なよもぎのにおいさえ感じられた。車内のスピーカーは快い管弦楽の旋律を流していた。

「とにかく、少々力のおよばない課題である。それだけにちょっと慎重にとりかからねば……明朝はひとまず決定書の伝達と基本方針の討議だけにとどめて各

歌の節がとくにはっきりと耳に残った。デッキからはけけ吹き込む風に若者たちの髪が強くふくまれている。
「青春！ 青春！ きびしいたかいと訓練のさなかで育ちしもの」
「青春！ 青春！ きびしいたかいと訓練のさなかで育ちしもの」
「青春！ 青春！ きびしいたかいと訓練のさなかで育ちしもの」

やがて汽車はつぎの駅のホームにすべりこんだ。デッキで歌をうたっていた若者たちは、わーっといっせいに飛び降りると、駅の構内の空き地にあるパレードの方へ駆けだした。もう誰かが打ちあげたのか白いボールが青い空をぐるぐる回りながら高く舞い上がったかと思うと、大きな弧を描いて落ちてきた。にぎやかな叫び声をあげながら若者たちはパレードにうち興している。私は自分も仲間に加わりたい衝動をおぼえながらデッキの上から立ち止まってそれを見ていた。

